



## 会いに行く

一年 天野蓮士

「今日も来たよ!」

「ありがとう!うれしい!」

僕の祖父の家にはトイプードルの犬がいる。名前はさくら。僕が玄関を開ける前から、僕たちの車の音で誰が来たのか分かるようで、扉の前でしっぽを振って、くるくると走り回っている。僕が声を掛けると、さくらも応えてくれるのが分かる。人間の言葉、犬の言葉、分かるはずが無いのかもしれないが、僕はさくらの気持ち分かるし、さくらもきつと僕の気持ちが分かる。

サッカーでシュートを決めてご機嫌でさくらに話しかけると、キラキラした瞳で僕を見つめながら、嬉しそうに話を聞いてくれる。その様子はまるで母のようだ。僕もそんなさくらに話をするのが大好きなので、時間がある時は祖父の家へ連れて行ってもらう。

「また来たよ!」

疲れてイライラした日、さくらに声を掛けるとさくらはいつものように豪快にしっぽを振り僕の周りを走り回る。だが、

「今日もこれ投げて!わたし取ってくるよ!遊ぼうよ!」

と、さくらのお気に入りのカメラのぬいぐるみを僕の所へは持つてこない。ただただ僕が今日家にきてくれたことが嬉しいことを体全体で表現するのみだ。きつと、僕のご機嫌がなめなのが分かっているのだろう。いつものように甘えたり、じゃれたり、何かを多く求めても僕が良い反応をしなかったり、もしかしたら逆に怒られてしまうかもしれないと感じているのだろう。その様子はまるで僕の妹のようだ。

津波や地震、洪水などの震災で、ペットと家族が離ればなれになってしまう状況をテレビで目にするのが最近とても多く感じる。異常気象だ。自然災害の恐ろしさを痛感する。もし僕とさくらがあの状況だったらと思うだけで胸が締め付けられる。実際に被災した方のつらさは、本当に計り知れないものだろう。

お互いの心を感じ取りながら、相手をいたわり、思いやりのある態度でふれあうペットとの関係は僕たち人間にとってかけがえのないものだ。ペットは家族の一員ではないという意見もあるかもしれないが、僕にとってさくらはまぎれもなく家族の一員だ。

人間よりも早くやってくることが多い犬の寿命。その時の自分はどうなってしまふのだろうか。だが、離れなくてはいけない、別れなくてはいけない時が来る。そのことをしっかりと理解しながら、命の尊さを感じながら今日も僕は大好きなさくらに会いに行く。さくらと一緒に心のつながったかけがえのない温かな時間を過ごすために。